



湊の風

八戸市立湊中学校
学校通信 第2号
平成27年7月8日
文責：田中芳和

厳しさの向こうにあるもの ～我が子を、本番に強い人に育てるために～

校長 北山 勝 則

6月20日から繰り広げられた熱戦は、湊中選手団と応援団のパワーが爆発し、団体戦で優勝カップ4つという輝かしい結果で幕を閉じました。(カップ3つの下長中と東中を抑え、市内で第一位です)

数日前の壮行式では、選手団も応援団も気迫に満ちあふれ、体育館の空気を振動させ、観客の心臓まで震えさせていました。そして、まるで湊中のためにあるような「みなぎる闘志を解き放て 八戸の地に熱き想いを」のスローガンの元、第66回八戸市中学校体育大会夏季大会開会式が行われました。約500名の吹奏楽団の演奏は大迫力でしたが、その行進曲の音を封じ込めるほどの勇ましい掛け声で湊中選手団が入場してきました(行進曲のリズムに合っていなかったのは、気にしないでください)。正面席最前列で待ち構える各校長は自校生徒を起立して迎えるのですが、湊中生の真剣かつ気迫にあふれたすばらしい行進を自慢したい衝動に駆られているところに、両隣の校長から「湊中、勢いある」「いい気合いだね」の賞賛に、思わずごっつり顔。と同時に生徒がめんこくてめんこくて、涙がこぼれていた北山がいました。

団体戦で優勝を掴み取ったのは、男子バレーボール(4年連続9回目)、男子柔道(2年ぶり19回目)、男子水泳(8年ぶり25回目)、女子水泳(6年連続30回目)の4種目でした。また、女子バスケットボールと女子ソフトテニスが第3位に入賞しました。個人戦では、水泳男女、陸上男女、ソフトテニス女子、柔道男女と、優勝を始めたくさんの入賞者がありました。7月18日～20日に青森市を主会場にして行われる県大会へ、総勢49名が出場します。特に、水泳男子の三浦恵太くんは、200mと400mの個人メドレーで自分の大会新記録をさらに塗り替えて優勝しています。全国大会まで駆け上がる期待が、現実味を増してきました。また、陸上女子の100mで大会新記録を出した上野知音さんは、将来が期待されます。



さて、ここで、湊中生にも保護者の皆さんにも考えて欲しいことがあります。大会で「実力を出せた者」と「出せなかった者」、「本番に強い者」と「弱い者」、この違いは何なのかということについてです。

先生方の話題や今までの経験から、本番で実力を出せない原因となりやすいものは、次のように考えます。(それぞれのアドバイスも記入)

『自己決定力が弱い』…すぐ頼る、自分のことを自分でやれない、考えない、決めない
アドバイス(自分で考え、自分で決めて、強い意志で挑戦することが大切)

『自己理解不足』…自分の弱点と持ち味が分かっていない、現実の自分と向きあえない
アドバイス(自分の弱点を攻めずに受け入れる、自分の感情を第三者的に見る)

『自己肯定感が低い』…自分のことをダメだと思っている、ストレスに弱い、超真面目
アドバイス(叱られたことを弱点の発見と喜ぶ、自己合格ラインを下げる)

『完璧主義者』…完璧じゃないとすべて失敗と考える、いろいろ気に掛けすぎる
アドバイス(小さな成功の積み重ねが大きな目標達成の近道、鈍感さも必要)

『協調性不足』…人のために尽くせない、周りの目を気にする、人前で失敗できない
アドバイス(弱点をさらけ出せると吹っ切れて動ける、人の役に立つ奉仕の心)

では、どうすれば、本番に強くなれるのかですよね。まとめると「自分を知り、自分で考え、相手への奉仕の心を持ち、仲間と共に今できることに取り組み、失敗から学び、習慣となるまで反復し、成長している自分を肯定する」ということになります。これをもっと絞り込むと、本番に強い人は『失敗に強い人』、そして、『適度な緊張感を楽しめる人』です。

学校生活には、叱るという場面が多々あります(もちろん同時に生徒の言葉や心を大切にすることは言うまでもありません)。現代の子ども達は、自分の思い通りにいかなかったり、ちょっとしたつまずきがあったりすると、すぐ、諦めてしまう傾向が強くなります。できない言い訳ややめることで自分が傷つくことから逃れようとしてしまいます。湊中の生徒も例外ではありません。当然、先生方は、やるべきことを怠ったり失敗したりしたときに、叱るときがあります。夏季大会に向けて、各部で相当量の叱りつける言葉が発せられました。ここに、大切なポイントがあります。今回の夏季大会のすばらしい結果の裏には、相当の厳しさがありました。それは、部活動だけでなく、学級でも、授業でも…。

この三年生達の多くが本番で力を発揮できたのは、生徒が厳しい指導についてきたパーセントが高かった

からと考えています。自分の足りなさを言い訳しないで素直に受け入れ、努力を重ね、緊張感の中に身を投じることができているのだと思います。背景には、厳しさを肯定してくれる保護者の存在があります。他校との情報交換をすると、子どものつまずきを我慢できずに教師の責任を追及したり、我が子に努力不足があっても体面だけは取り繕おうとしたりと、まさに、我が子を本番に弱い人にしてしまっている話を聞いて残念でなりません。保護者は、可愛さゆえに、なかなか我が子を厳しく突き放しきれません。よって、第三者の力を借りることがあります。「可愛い子には、旅をさせろ」ですよね。つまり、子ども本人が、厳しくされることを辛い苦痛の時間と思うのか、やってやるという意欲的な挑戦の機会にするのかの違いであり、その分かれ道は、保護者の受け止め方です。保護者も一緒に、我が子が厳しくされていることを、適度な緊張感(ストレス)として楽しめるゆとりが欲しいですね。たくましさの育成のために。

